

『箒』

九(いちじく)

5,845 文字

あらすじ

妊娠の報告をするため、実家に帰省した林山サトミ。新しい命を授かったことへの喜びがある一方、初めての妊娠に不安を感じている。その不安を母に伝えた次の日、目覚めると足元の壁に逆さまにした箒が立てられていた。それは、無口な父からのプレゼントだった。

あぜ道を車で進むこと数分。

ようやく目的地に到着した。

車を止めて外に出る。ドアが閉まる音に驚いた雀が屋根瓦から飛んでいく。その様子を目で追って空を見上げた。

青一色の景色が視界に飛び込み、どこか開放的な気分になる。都会だったら、こうはいかない。立ち並ぶ高層ビルが空を四角く切り取り、どこか窮屈さを感じさせてしまうからだ。しかし、ここには視界を阻害するものなど一つもない。

深呼吸してみる。

クーラーで冷えた空気が放出され、代わりに自然の空気が肺の中に入ってきた。夏真っ盛りなのに、どこか冷たく感じる。ここが水田に囲まれているからだろう。

そういえば、実家で暮らしている間はクーラーを使ったことがない。窓を全開にしておけば、冷たい風が入ってくるから必要なかった。

今も炎天下の中、外にいるが汗一つかくことがない……とはいえないか。

いくら風が冷たくても、太陽は容赦なく照らし続けている。太陽光を浴びた肌から、じりじりと熱を帯びていく。このまま居続ければ、熱中症で倒れてしまいそうだ。それに、せっかくの純白の肌を焼くのは抵抗がある。

私は日陰を求めるかのように家の中に入った。

「ただいま」

声をかけるが返事がない。しばらく待っていると、ドタドタと足音が聞こえて、奥から母さんが顔を出した。

「サトミ。おかえり。ずいぶん早かったのね」

「うん。高速が空いていて、予定より早く来ちゃった」

靴を脱ぎながら、母さんに手土産を渡す。名物の饅頭だ。

手ぶらで帰るのもあれだなあと思い、迷った挙句に無難なものにした。「美味しそうね」と笑顔の様子を見ると、饅頭にして良かったと思う。さすが、『地元民が選ぶ土産したいNo.1』に選ばれているだけはあるわね。

「それにしても、何年振りだっけ？」

「大学を出てからだから、四年かなあ」

「もう、そんなに経つのね」

「ねえ。母さん」

「何？」

「あの……やっぱり、いいや。父さんは？」

「今、醤油を買いに出かけているの。ちょうど切らしちゃって。お父さん、サトミが帰ってくるって聞いて喜んでるのよ」

「あの、父さんが？」

いつも不機嫌そうに口をへの字に曲げている無口の父さん。笑顔など一度も見たことない。誕生日の時でさえ、しかめっ面だった。暗闇の中、蠟燭の火に照らされた父さんの顔が恐ろしくて泣いた記憶がある。それ以来、我が家では誕生日に電気を消さなくなった。

それに、父さんは私に無関心なのだ。

父さんに褒めてもらいたくて、あらゆる努力をした。小学生の時にテストで満点をとったり、高校生の時には陸上の全国大会にも出場した。しかし、父さんは、いつも『そうか』の一言だけ。それ以外の言葉はかけてくれない。

だから、いつの日からか、父さんと距離を置くようになってしまった。

その父さんが喜んでる？

笑顔の父さんを想像してみる。

……………ないわね。

ありえない妄想に苦笑を漏らして、茶の間へ入る。

どうやら、掃除の途中だったらしい。脚を折りたたまれたちゃぶ台が土壁にもたれかかっている。

「ごめんね。まだ掃除中なの。ちゃちゃっと終わらせるから」

母さんが腕まくりをしつつ、箒に手を伸ばした。私が小さい頃からあるので、軽く二十年は使われていることになる。いくら物を大切にするとはいっても、二十年は使いすぎじゃないかな。

「ねえ、掃除機をプレゼントしようか？」

「え？ ああ。いらないわよ。これがあるもの」

「その箒、だいぶ古いでしょ？」

「まあね。でも、この箒は捨てられないの」

母さんが愛おしそうに箒を見た。そして、すぐに笑顔を私に向ける。

「それに手入れは、ちゃんとしているのよ。ほら、新品みたいでしょ」

母さんが自慢げに見せる箒は確かに新品同様だった。長年使っていたら穂先が曲がっていてもおかしくないのに、母さんの箒はまっすぐだ。

「手入れをすれば、何年でも使えるものなのよ」

えっへんと胸を張る母さん。その姿がどこか子供じみていて、つい笑みをこぼしてしまった。

「私も掃除を手伝うわ」

「そんな、いいわよ。運転で疲れたでしょ」

「待っているのも暇だし」

「……本当？ じゃあ、お願いしようかしら」

しばらく考えてから、母さんが箒を手渡す。

「台所の掃除をしているから、何かあったら呼んでね」

出て行く母さんを見送ってから、茶の間の掃除を開始する。

畳の目に沿うように箒で掃いていく。そうしないと埃やゴミが畳の凹凸に挟まってしまふから。母さんに何度も言われていたことだ。

昔は、茶の間を掃除するのでさえ大変だったな。

小学生だった私は、何十分もかかっていたのを覚えている。もちろん、掃除に慣れていなかったのもあるけど、それ以上に、小さな私には茶の間が広すぎたのだ。

しかし、大人になった今では、茶の間はむしろ狭く感じる。あれだけ苦勞していた掃除も数分で終わってしまった。

ちゃぶ台を元の場所に戻して、三枚の座布団を囲むように置いて掃除を終える。

ふと一息つくと同時に、鳩時計が十二時を知らせた。子供の時に見上げていた鳩時計も、今では目線の高さと同じ。大人になったんだなあとしみじみと感じる。

……大人かあ。

薬指にはめた結婚指輪に視線を落として、ため息を漏らす。

とりあえず、掃除が終わったことでも伝えに行きますか。

箒を壁にかけて、私は台所へと向かった。

台所に近づくと、トントントンとリズムカルな音が聞こえた。

「終わったよ」

母さんの背中に声をかける。

「ありがとう。もうすぐ、ご飯できるからね」

「何を作っているの？」

ぐつぐつと音を立てている鍋の蓋を開けて中を確認する。大好物の肉じゃがだ。

「小さい時から好きだったでしょ？」

「うん。大好き」

近くにある菜箸を手に取り、鍋からジャガイモを取り出して頬張る。ほくほくのジャガイモ。味がよく染みている。美味しい。

「こら。つまみ食いしないの。もう少しで、できるから」

「はい」

懐かしいな。

実家で暮らしていた時は、こういうやりとりを良くやっては、母さんと笑い合っていた。

母さんも懐かしかったのか、くすっと笑みを浮かべた。

トントントン、と大根が千切りにされていく。どうやら、大根サラダを作っているようだ。

「もう少しでお昼ご飯ができるから、茶の間で待っていたら？」

まな板から視線を離さずに母さんが話す。

「……うん」

母さんの提案に頷きつつも、私は離れなかった。ただじっと母さんの手つきを見続ける。

「ねえ。母さん」

続きを言おうか数瞬悩んだ後、ぽつりと呟く。

「私ね。妊娠したの」

「おめでとう。良かったじゃない」

手を止めて笑顔で振り返る母さん。しかし、私の沈鬱な表情を見て、心配そうに母さんが声を細めた。

「どうしたの？ 嬉しくないの？」

「うん。嬉しいよ。でも、なんて言うかさ……」

子供ができたことは嬉しい。

しかし、初めての妊娠ということもあり、言葉にはできない不安が私を襲っているのも事実だ。自分でも何が不安なのかわからない。出産が不安なのか。子供を育てることが不安なのか。それとも、別に不安の要素があるのか。理由がわからない不安感に押しつぶされそうで、鬱々とした気分になっている。

だから、実家に帰ってきた。

母さんに言えば、何か教えてくれるんじゃないかと思ったから。

でも、この不安をどう伝えればいいんだろう。

家を出てから今に至るまで考え続けても、結局答えは得られなかった。

しかし、言葉で伝えずとも母さんには伝わったようだ。

「不安なのね」

母さんの言葉に、こくりと頷く。

「私もね。サトミを妊娠した時は嬉しい反面、不安もあったの。何がって聞かれると困るんだけど。言葉にできない不安があったわ」

「母さんも？」

「そうよ。その時、どうしたと思う？」

私は、かぶりを振る。

母さんは、にっと歯を出して答えた。

「サトミと一緒に。私も母に聞いたのよ。そうしたら、母はなんて言ったと思う？ 『私も初めての時は不安だったから、母に聞いた』って言うのよ。親子って似るものなのねえ」

「母さんは、それを聞いて不安がなくなったの？」

「なくなるわけじゃない。アドバイスをもらったわけじゃないんだから。でもね。不安を抱えるのは私だけじゃない。母も同じなんだって思ったら、気持ちが楽になったの」

それにね、と母さんが話し続ける。

「母も父も、私を支えてくれた。もちろん、お父さんもね。サトミにも、支えてくれる人がいるでしょ」

支えてくれる人、と聞いて夫のタダユキさんを思い出す。それに父さんと母さんも、だ。

「不安は消えることはないの。でも、支えてくれる人達が、必ず安心感を与えてくれるわ。だから、頼りなさい。不安を忘れるくらい安心感に浸れるまで頼ればいいの」

大人になるということは、親の元から離れて自立すること。たとえ、どれだけ辛くても悲しくても、親に頼ることなく自分で解決していかなければならない。それが大人になるということだ。

そう思って、辛さも悲しみも耐えてきた。

だから、妊娠の不安も自分一人で解決しようと頑張った。

解決策を見つけようと、もがき苦しみ、それでも見つけられずに、さらに不安感に煽られる。そんな負のスパイラルに陥っていた私に母さんが手を差し出してくれた。

不安がなくなったとはいえない。でも、私のことを思ってくれる人がいる。支えてくれる人がいる。そう思うと、自然と気持ちが楽になっていく。

「そうだ。産休をとったら帰ってきなさい。その方がいろいろとサポートもできるし、気持ちも楽でしょ」

「うん。タダユキさんと相談してみる」

「それなら、タダユキさんに有給をとるように伝えておきなさい」

「聞いてみるけど、とれるかな？」

「何を言っているの！ こういう時はね。夫が妻の側にいるのが一番いいの。私の時もね。わがママを言って、お父さんに側にいてもらったのよ。炊事洗濯までしてくれるんだから、楽になるわよ」

実家で暮らしていた間、父さんが家事をしていた場面など一度も見ることがない。その父さんが母さんのために家事をこなしたって？

想像してみる。

塩と砂糖を間違える父さん。火加減を間違えて料理を真っ黒にする父さん。大量の洗剤を洗濯機に入れる父さん。洗濯物をめちゃくちゃにたたむ父さん。うーん。どう考えても、家事を上手にこなす父さんが想像できない。

「サトミの想像通りよ」

母さんが苦笑を漏らす。

「でも、私のために必死になっている父さんは、かっこ良かったわ」

噂をすればなんとやら。父さんがぬっと顔を出して、買い物袋を母さんに手渡した。

「今、帰った」

父さんは、昔と何も変わっていない。不機嫌そうに口をへの字に曲げている。私を見ても、その表情には変化は見られなかった。

「父さん、ただいま」

「おかえり」

それだけ言うと、父さんは母さんに視線を向けた。

「買い忘れがあるから、もう一度行ってくる」

「お昼、もうすぐできますよ」

「すぐに帰ってくるから」

台所から姿を消す父さん。声をかける暇もない。妊娠の報告をしようと思ったのに。

まあ、昼ごはんを食べている時でいいか。

妊娠の報告をしても父さんの表情は変わらなかった。

返ってきた言葉も「そうか」の一言だけ。それ以上、父さんからは何も言われなかった。

結局、今日一日で私にかけた言葉は「おかえり」と「そうか」の二言だけだ。

本当に私が帰ってきたのを喜んでいるのだろうか。久しぶりに会ったんだから、もう少し話をしようとは思わないの？ 『最近どうだ？』とか聞けばいいのに。

まあ、父さんに問い詰めても「そうか」で済まされてしまいそうだから、言わないけど。

そして翌朝、目覚めると足元に箒があった。

壁に寄りかかっている箒。なぜか、穂が上で柄が下、つまり逆さまに置かれている。しかも、昨日使った箒とは別の物だ。

どうして、ここに箒があるのかな。

うーん、と寝起きの頭で考えてみる。

置いた人物は、父さんか母さんしか考えられないんだけど。理由がわからない。もしかして、私へのプレゼント？ でも、箒を欲しいなんて言ったことないし、そもそも欲しいと思ったことすらない。どうせなら、最新型の掃除機の方が欲しかったな。

だめだ。理由が思いつかない。

まあ、置いた本人に聞く方が早いかな。

箒を持って自室を出る。

どちらか起きていないかなあ、と探していると、台所から味噌汁の香りが漂ってきた。食欲をそそる香りに誘われて台所に向かうと、母さんが朝食の準備をしていた。

「おはよう」

「あら。サトミ、おはよう」

「ねえ。母さん。これを私の部屋に置いた？」

「うん？ 置いてないわよ」

ちらりと母さんが箒を見て答える。

「それ、どうしたの？」

「起きたら、部屋にあったの。母さんじゃないってことは、父さんかな。でも、なんでだろ」

「もしかして、足元に置いてなかった？ しかも、逆さまだったでしょ」

「うん。どうして知っているの？」

くすっと笑みをこぼす母さん。

「それを置いたの、間違いなくお父さんよ。私もね。置かれたことがあるの」

「母さんも？」

母さんが手を止めて、懐かしむように目を細めた。

「昨日、言ったでしょ？ 初めて妊娠した時、母に相談したって。その時に父さんも聞いていたのね。ある時、起きると足元に箒が置いてあったわ。ほら。昔から使っている、あの箒よ」

あの箒は父さんからのプレゼントだったのか。だから、大切に使っているのね。でも、なんで箒なんだろ？ プレゼントだったら、安産祈願のお守りにした方が良いと思うけど。

「この近くには神社も寺もないからね。それに、箒も安産祈願のお守りになるのよ」

「箒が？」

「昔からね。箒には産神の箒神が宿るって言われていて、妊婦の足元に箒を逆さまに置くと安産になるって信じられているの。それをお父さんも知っていたみたい」

素直になれない父さんの精一杯の気遣いってやつか。

それにしても、心の中では私のことを思っていてくれたんだ。それに気づいて、つい頬が緩んでしまう。

あれ？ でも、私は不安に思っていることを父さんには話していないんだけど。

「たぶん、台所で話しているのを聞いていたのよ」

買い忘れって、箒のことだったのか。

「まったくもう。心配するなら態度で示してほしいわ」

「不器用なりの思いの伝え方ってやつよ」

ふふっと笑みをこぼす母さん。

「父さんは？」

「まだ寝ているわよ」

「起きたら、お礼言わないと」

「絶対に知らないふりをするわよ。私の時もそうだったもの」

会話が一段落したのを見計らったのか。それとも偶然か。父さんが台所に現れた。

「父さん、ありがとう」

「うん？ なんのことだ？」

母さんの言う通りに、すつとぼける父さん。

私と母さんは、顔を見合わせて笑ったのだった。